



学校通信

平成29年度 第4号
平成29年 6月30日
練馬区立開進第三小学校
校長 土屋 信行

受け止める・受け入れる

校長 土屋 信行

今月は「話の聴き方」について考えてみたいと思います。

両極端な例として、人の話のほとんどを受け入れようとする聴き方と、自分の考えに固執し、人の話や意見はほぼ受け入れようとしない聴き方が挙げられます。どちらも著しく偏っており、普通はこの二つの間のどこかで折り合いをつけて人の話を聴いていることが多いと思います。

それでは一歩進んで、人の話を自分の考え方・生き方等に生かしている人というのは、どのような話の聴き方をしているのでしょうか。

それは、「人の話がどんな内容であっても、まずは『受け止める』。その上でそれを『受け入れる』のか『受け入れない』のか、自分の判断基準に照らして決める。」という聴き方をしているのだと私は思っています。そして受け入れたものを、今までの自分の考えとすり合わせて、新たな考えとしたり、レベルの上がった考えに高めたりしているのではないのでしょうか。勿論、受け入れる内容や範囲、受け入れる器の大きさ等は人によって違いますから、そこには自ずと個人差が現れ、いつしかその人らしさが形成されていくのだと思います。

さて、このことに関して子供の場合はどうでしょうか。

集団生活に入る前の幼い子供たちは当然のことながら「受け入れる」ことが中心の生活を送っています。従って、まず家庭においては、正しいこと・善いこと等、受け入れてほしいことを繰り返し指導していることでしょう。

しかしながら日々の生活の中では、身近な人の言動から、受け入れてほしくないことも受け入れてしまうことがあります。仮に家庭では大丈夫でも、保育園や幼稚園、そして小学校に入学すれば、必ず異文化と出会うことになるのです。そこには、保護者の方からすれば、受け入れてほしいこともあるでしょうが、受け入れてほしくないことに接する機会が多くなることも否めません。そして、これらをすべて保護者の方や教師の力で遮ることは不可能です。

ここで大切になってくるのが、先程述べました「まず『受け止める』。そして『受け入れる』のか『受け入れない』のかを自分で決める。」という営みを子供自身ができるようになることです。また、「過去に受け入れたことでも、悪いことであると気付いた時に捨てる。」という営みも必要です。

子供がすべてをまず「受け止める」。そして自分で考え、正しいこと・善いことを「受け入れる」。これができるように、人としての正しい判断基準をしっかりと指導することは、私たち大人の重大な責務である考えます。

それでも子供は失敗を繰り返すでしょう。そのような時は、その都度何度でも、繰り返し繰り返し指導することを怠らないようにしたいものです。

